

伊万里・有田焼の産業振興とまちづくり

—産業と地域、伝統と創造のダイナミズム—

と な 直 喜
十 名

目 次

- 1 はじめに
 - 2 苦境にあえぐ有田・伊万里の陶磁器産業
 - 3 「有田の3右衛門」にみる伝統と創造
 - 3.1 14代酒井田柿右衛門にみる伝統継承の重みと創意的努力
 - 3.2 色鍋島の真摯な継承と今右衛門
 - 3.3 暮らしを楽しむ文様に生きる源右衛門窯
 - 4 有田の伝統とまちづくり
 - 4.1 有田の産業観光とまちづくり
 - 4.2 女性による有田まちづくりの創意的な活動
 - 4.3 伝統保存とまちづくり
 - 5 伊万里の産業振興とまちづくり
 - 6 おわりに
- 【補論】まちづくりと行政のあり方を考える
資料一覧

1 はじめに

「日本磁器のふるさと」への眼差し

日本磁器のあけぼのは、桃山末期の1610年から江戸初期の1619年前後の頃とみられる¹⁾。「日本磁器のふるさと」として名高い有田・伊万里、まずはその伝統ある歴史に立ち返ってみたい。

慶長の役（豊臣秀吉の朝鮮出兵）で朝鮮に出兵した鍋島藩主・鍋島直茂が連れ帰った朝鮮人陶工の李参平は、有田泉山に磁鉱を発見し、そこに天狗谷窯を築いた。それが伊万里・有田焼の始まりとされる。

江戸時代に有田を中心とした地域で生産され、近郊の伊万里港から積み出されて国内外に流通した肥前の磁器は、当時、「伊万里焼」あるいは「伊万里」と呼ばれていた。明治以降は、やきものを産地名で呼ぶことが一般的になり、有田で焼かれた磁器を「有田焼」、伊万里市で焼かれた磁器を「伊万里焼」と呼び分けるようになった。原料、成型、加飾など技法が同じであることから、現在では「伊万里・有田焼」の統一名称で呼ばれている²⁾。

伊万里・有田焼の伝統として、古伊万里、柿右衛門、鍋島という3つの流れと様式がみられる。意匠、製作工程上の技法においては多くの

1) 永竹 威『日本の磁器1 伊万里』保育社、1973年、107ページ。

2) 「特集：伊万里・有田焼」<http://www.kougei.or.jp/crafts/0422/special>。

共通点をもつが、生産条件、需要者層、流通機構を異にし、作品の形状、模様、配色、絵付け技法などにおいては、それぞれ特色をもつ。それらが固有の美と技術を競いつつ、相互に作用し、刺激と影響を与えあい、重厚かつ華麗な伝統を形成してきた。

古伊万里は、柿右衛門、鍋島を除いた伊万里・有田焼のすべてを指し、江戸時代の磁器を代表するものである。窯場は広範囲に及び、生産された品種も絵模様も多様である。

柿右衛門は1646年、赤絵技法を完成し、さらに赤絵の色彩効果をあげるために乳白色の溜にこ手てという素地の調整に成功する。この素地があつてこそ、「余白の美」が成り立つのである。赤絵技術の完成と他の追随を許さない精錬熟達した技術により、確固たる地位を占め、肥前磁器の一大潮流を形成した。

鍋島焼は藩窯で、2代藩主・光茂が1628年、京都の窯焼・副田喜右衛門をして藩窯を有田岩谷川内に設けさせたもので、1675年に大川内山へ移された。古伊万里と同様、元禄・享保の時期が最盛期であるが、意匠を凝らした流暢な美しい線など、気品と風格、技術の熟達は他に類を見ないといわれる³⁾。

日本磁器の故郷としての伝統をもつ有田・伊万里、その産業と地域は、明治以降の近代化、第2次大戦後の高度成長と石油危機、円高、金融危機など激動を経て、なおも厳しい経済環境が続くなか、どう凌いでいるのであろうか。

伝統ある産業・地域調査の基本視点

サステイナブル産業・地域研究会は、毎年2月下旬から3月上旬の頃に各地を訪問し、産業・地域の見学調査を続けてきた。スケジュールの

3) 下平尾 勲『現代伝統産業の研究—最近の有田焼の経済構造分析—』新評論, 1978年。

やり繰りが年々難しくなっているが、新たな出会いと発見に心踊らされ、襟を正されるなど得難い機会となっている。

2010年には西九州(佐賀・熊本)に出かけ、有田・伊万里の産業・地域調査を行った⁴⁾。見学調査の段取りが大変遅れてしまい、実施も危ぶまれていたが、窓口以最良の人を得て一気に具体化し、例年になく充実した調査を行うことができた。窓口となっていたのは佐賀県陶磁器工業協同組合・専務理事の百武龍太郎氏で、愛知県陶磁器工業協同組合・専務理事の鈴木政保氏のご紹介によるものである。

有田・伊万里調査の基本的な視点としたのが、伝統と創造のダイナミズムである。伝統のキーをなす調査先としてまず重視したのが、柿右衛門様式の深い伝統を本にされた⁵⁾ 14代酒井田柿右衛門氏への面談である。拙著⁶⁾をまとめる際にご本を参考にさせていただくなど数年前から注目しており、直にいろいろお聞きしたいとの思いがあった。ご多用で体調も心配なご様子であったが、お手紙にてご理解いただき実現することができた。また、3右衛門として名高い今右衛門、源右衛門への面談が適ったことも有難いことである。他方、創造型経営と伊万里焼の現代的再生に活躍されている畑萬陶苑を

4) この2年、調査先を九州に絞りに、2009年は東九州(鹿児島・宮崎・大分)を訪れ、蒲江・北浦のブルーツーリズムなどを調査した。小論文「産業・地域の文化的創造とブルーツーリズム—辺境を文化交流拠点へ変える蒲江・北浦大漁海道に学ぶ—」(『名古屋学院大学研究年報22』)は、それらの一部をまとめたものである。

5) 14代酒井田柿右衛門『余白の美 酒井田柿右衛門』集英社新書, 2004年。

6) 十名直喜『現代産業に生きる技—「型」と創造のダイナミズム—』勁草書房, 2008年。

見学調査し、別次元に位置するとみられる3右衛門と比較するという貴重な機会を得ることができた。

有田・伊万里調査のもう一つの基本視点は、伝統的な地場産業内に対象を限定せず、地域の視点から、むしろまちづくりとの関わりをなかで産業と経営、その技術と文化を捉え直すことであった。そうした思いから、有田観光情報センター、有田まちづくり女性懇話会などのリーダーにも面談して、産業振興とまちづくりをどうつなげ組み合わせていくかを考えることができた。先述の畑萬陶苑の活動も、両者の橋渡し役として位置づけることができる。

調査をスタートするにあたり、佐賀県陶磁器工業協同組合にて百武氏より、業界状況を俯瞰する情報を伝授していただいたことは、大変役に立った。また、調査の中でもアドバイスをいただくなど丁寧なフォローが大変有難かった。

小論は、上記のような視点および状況をふまえ、見学・聞き取り調査を行いまとめたものである。

2 苦境にあえぐ有田・伊万里の陶磁器産業

やきものメッカの台所事情

有田は今も、歩いて楽しめるやきものの町として、全国で最も高い評価がみられる。「日本一の窯場」として「買い物、観光、体験とすべての面が充実している」、「やきもの史に残る町だと納得させられる」、「作家も窯元も若い力の成長がすすがしい」といった声も出ている⁷⁾。

しかし、その舞台裏というか台所事情は極めて厳しいものがあり、有田・伊万里においてす

ら陶磁器産業の苦境は、当初の予想を超えたものがみられる。企業の淘汰は一段と厳しさを増しているが、そうした中で創意的に苦境を切り拓く地域や経営の動きも注目される。

旗振り役である佐賀県陶磁器工業協同組合・専務理事の百武龍太郎氏の元気で快活なお姿に、再生に向けた心の火を見る思いがする。

佐賀県陶磁器工業協同組合の共同集金事業

佐賀県陶磁器工業協同組合の共同集金事業には120社が参加している。統一手形制度に基づき商社への集金を組合に委託する共同集金事業は、1962年に始まる。商社にとっては支払いの簡便さ、メーカー側も集金業務が簡素化でき与信も付くという、Win-Winの関係にあった。旅館やホテルへの業務用食器の納入が増え、京焼から有田焼へのシフトも進んだ。直接取引も2割ほどみられる。



図1 百武龍太郎氏（中央）と研究会メンバー
注：写真は児島完二氏（右端）提供。

出荷額の激減とその背景

佐賀県陶磁器工業協同組合の会員数は、1998年162社から2008年には120社に激減しており、その後も8社が廃業・脱退に追い込まれている。組合費は月額1万3千円であるが、大手3社と3右衛門は別口でお願いしている。

この間、表1にみるように出荷額も、1998

7) 日本経済新聞、2009年9月12日付。

表1 有田焼の製品出荷額と従事者数

年度	出荷額（製品別）								従事者数（地区別）			
	日用 食器類	洋食器 類	美術品 置物類	工業用 品	磚子	タイル	その他	合計 (千円)	有田	伊万里	吉田	合計 (人)
1989	2,220	47	681	430		619	114	4,111	4,101	503	216	4,820
1990	2,227	59	638	381		609	209	4,123	4,027	489	238	4,754
1991	2,358	74	651	279		497	184	4,043	4,048	478	230	4,756
1992	2,217	70	614	476		591	165	4,133	3,925	460	225	4,610
1993	2,054	73	539	482		480	199	3,827	3,641	435	227	4,303
1994	2,048	74	564	373		319	262	3,640	3,660	420	213	4,293
1995	1,852	79	520	217	133	246	291	3,338	3,642	459	250	4,351
1996	1,899	134	452	250	114	261	152	3,262	3,619	453	240	4,312
1997	1,851	70	426	213	117	93	224	2,994	3,646	415	228	4,289
1998	1,446	32	362	288	107	133	186	2,554	3,090	387	208	3,685
1999	1,353	49	383	113	121	54	110	2,183	2,779	346	173	3,298
2000	1,294	57	342	122	114	46	104	2,079	2,554	331	141	3,026
2001	1,165	47	338	123	91	36	65	1,865	2,476	303	147	2,926
2002	1,046	43	273	120	65	29	35	1,611	2,279	298	133	2,710
2003	1,004	42	212	136	62	9	106	1,571	2,164	276	124	2,564
2004	917	41	174	149	64	7	98	1,450	2,119	277	108	2,504
2005	869	39	162	131	73	9	73	1,356	2,007	248	113	2,368
2006	834	45	162	169	67	12	89	1,378	1,936	237	99	2,272
2007	785	56	175	175	81	10	84	1,366	2,048	232	96	2,376
2008	686	55	161	87	76	7	32	1,104	1,935	176	84	2,195

注：佐賀県陶磁器工業協同組合資料に基づく。単位は、出荷額（千円）、従事者数（人）。

年の255.4億円から2008年には110.4億円へと4割レベルに落ち込んでおり、1989年411億円の約1/4になっている。この20年間で、日用食器類は1/3に落ち込んだが、工業用品1/5、タイル1/90などの落ち込みは目を覆うものがある。

従事者数も表1にみるように、1990年頃は4,800人前後であったものが1998年には4千人、2001年には3千人を下回り、2008年は

2,200人を切るに至っている。平均従業員数は1社7名であるが、工業製品の大手3社（従業員数）は突出して多く、岩尾磁器工業（179名）、香蘭社（220名）、深川製磁（200名）と200名前後を数える。香蘭社と深川製磁は、ネット販売もできるようにしている。

佐賀県陶磁器工業協同組合の他に、肥前陶磁器商工協同組合（180社）がある。両組合の取扱額は、最盛期に月額で55億円（前者）およ

び88億円（後者）に達した。しかし、現在では55億円が8億円でまで減少している。

売り上げ不振の原因は複合的であるが、その一つに官々接待の廃止がある。1995年には、役所も企業も接待費を大幅に減らした。同年1月に起こった阪神大震災により、1,8月の展示会が中止になるなど、落ち込みに輪をかける要因になった。近年は、中国品の輸入が急増するなか、より厳しい状況にある。

食文化の変化も、需要の減少を促している。惣菜などは洋食器の皿に移していたが、近年ではプラスチックの皿に代わり、移さないで食べるスタイルが広がっている。発泡スチロールの簡易容れものもみられるなど、洋食器文化を軸とするこれまでの生活様式に大きな変化が出てきている。

組合員の苦境と技術変化

地元商社（300社）は買う立場にあり、メーカーよりも強いという力関係がみられる。長引く不況のなか、メーカーに対する商社の支払いが滞りがちで、廃業・倒産は高水準に推移している。

一方、電子レンジの普及に伴い、遠赤外線を通さないというやきものの特徴がネックになっている。そこで、遠赤外線を通すようなシールを貼るとか、土の中に素材を練りこむなどにより電子レンジ対応の食器づくりが進められている。IH機器の普及に伴い、やきものに求められる機能性も大きな変化を余儀なくされている。

なんぼる
南原に幽閉されて鍋島藩の御用立て品をつくっていた伊万里焼には、鍋島焼の本流という自負がある。楽天によるネット販売も手掛けている。

3 「有田の3右衛門」にみる伝統と創造

3.1 14代酒井田柿右衛門にみる伝統継承の重みと創意的努力

3月3日、14代酒井田柿右衛門氏にお伺いし、40分近くにわたりヒアリングする機会に浴した。その2ヶ月半後の5月20日、NHKのBSハイビジョンでも、1時間半にわたり同氏へのインタビューが放映されたので、メモを取りながら拝聴した。インタビュー内容はかなり近いものであったが、3月時点で聞き落としていた点もあり、参考にさせていただいた。

生い立ちと学び

1934年、13代の長男として生まれた。父にはろくろを、12代の祖父には画と絵の具を習ったが、最近つくづく「大変な家に生まれた」と感じる。

1953年、多摩美大の日本画科に進んだ。「ものづくりはデッサンから始まるので、画を習いなさい」との12代の勧めによるものである。大学時代は深川の木場にいたが、デッサンに明け暮れた。「デッサンだけはみっちりやれ」、「デッサン力がないと何もできない。基礎がない者はうろろうろしがちだが、根っこが付いてないからだ」という。

大学を出て家に帰ったが、12代は画を、13代はろくろをやれという。「どちらをすればいいの？」ととまどう。大学時代の友人が「東京に遊びに来いよ」といってくれるので、時折、東京に出ていた。1か月ほど東京にいと、12代が「そろそろ帰ってこい」と迎えに来る。帰途、二人で名古屋の絵具屋によく寄ったが、昭和30年代は絵の具の色が変わっていく過渡期でもあった。伝統の色を12代から学び、昔の絵の具をすべて譲ってくれた。古文書ももらったが、よく読めない。なお、14代酒井田柿右

衛門は48歳で襲名した。



図2 14代酒井田柿右衛門氏（右側）と筆者
注：写真は児島完二氏撮影。

柿右衛門様式の世界とその学際的研究

「柿右衛門様式の研究」が、漆の研究とセットでなされたのは、九州産業大学においてである。5年間で4億円を使つての科研費による研究で、京大や東大の先生も含む17-8人の研究者が関わり、海外の文献・古文書なども読み込む。有田の貿易関係調査のなかで、当時の絵の具の研究もなされた。中国や岡山からも原料を入手している。有田の陶石からも赤や緑の色をつくっていたが、それを教えたのは中国人であろう。銅成分の緑青や鉄分の赤など、白い石の原料のなかに、色の原料が潜んでいたのである。

輸出向けの磁器製品は当初、絢爛豪華な中国製品のコピーであった。バランスのとれたものとアンバランスなものの両方がみられるが、アンバランスな美しさが求められていた時代もあった。

若い頃、柿右衛門様式の世界は「窮屈な狭いところ」と思い込んでいたが、入ってみると全然違って広い。余白の美を生かしつつ、自分らしさも出すことができる。この様式の中で、自分の個性を大いに出せると考えた。

にこして 濁手の復活

その白を支えたのが、地元の泉山の石である。石を採掘した場所によって白色も違うが、そこから温かみのある「濁手」(国の重要文化財)が生まれた。濁手は、米のとぎ汁のような温かみのある、やわらかい白というか独特の白の世界である。

海外でも珍重されたが、製造が難しいことから国内では商売にならなかったようで、5代目あたりから消えていた。復活させてはとの声もあり、12、13代が家伝の古文書『土合帳』をひもといて、1953年に復活させたものである。約300年を経ての復元である。材料の調査では、何俵という記述はあるが重さが書かれていない。「わからん、わからん」とばかりつぶやくなど、苦労していたという。生産歩留が悪く、いいものは10個つくっても2-3個しかできない。

伝統の原材料と味わい

12代は絵の具、13代はろくろが得意であったが、14代は両方を追究している。化学製の絵の具は、きれいだが味が無い。劇薬によって、長い年月を経て不純物のしみ込んだ味が一瞬のうちに取り除かれてしまう。進みすぎた化学が工芸の世界に入り込み、原材料がめちゃくちゃになっている、と憂慮する。

天草の石は白くてつくりやすいが、「魔性の石」でもある。きれいすぎて、泉山に比べると味が無い。自然の恵みである石には不純物が混ざっているが、それは素材がもつ大事な宝物であるという。不純物には、宇宙の恵みが染み込んでいる。ふわっとした味がなくなってきたが、自然の恵みを何とか残したい。

釘、銅板など、調味料になる明治以前の古いものを集めている。上杉家の墓を修復する際には、銅板などを分けてもらったとのことであ

る。松の薪を調達するのも大変な時代になっている。

伝統的な日本の美意識・美しさの探究

西洋人は「きれいさ」を追求するが、日本人は「しっとりとした美しさ」を追求する。味わいのある美しいものが姿を消してきているが、日本人なら両者の違いがわかる。

どこにでもあるような野山の楚々とした草花を描きたい。美しいとは何か、日本人の美意識の中にあるはずで、それを残すべしという。百年後のやきものの世界を考え、続けられるように、また美しいものを提供できるように15代とともに心得ていきたい。

14代は、江戸時代初期に思いを馳せる。当時の作品には、独特の美意識がにじみ出ているからである。石の表情がそのまま出ているし、画は表情豊かで、楽しそうに描かれている。こせこせせず筆の動くまま、思いのまま描いており、それが人の心をとらえるのである。元禄時代の有田に行ってみよう。泉山の石にも出会える。職人たちが、どういう思いで描き、どういう生活をし、どういうものを美しいとみていたのかを知りたいという。

マイセンとの交流

これまで20回以上、欧米に出かけており、マイセンの製陶所とは30~40年の付き合いがある。マイセン周辺の仕事場に入っていくと、職人たちがどのようにし何を考えているかがなんとなくわかる。彼らとは本音で話せるし、日本と欧州の違いがわかる。

マイセンの製陶所には、柿右衛門様式の研究の部屋がある。職人たちは、「専門の仕事をしてきた。一生の思い出になる」という。原材料研究へのこだわりも深く、時代に合った分析を続けていて、各種試料が完璧に保管されている。

第2次大戦後の工芸は展覧会文化で、評論家の先生方は作家が偉いともてはやし、職人は粗末に扱われている。作家は自分の世界であるが、職人は技の継承を旨とする伝統の世界である。3-5年の修行ではどうにもならない。マイセンでは毎年、50人ずつ寮に入れてスパルタ教育を施し、年に10-20人をマイセン工場に採用しているという。徒弟教育を通して学ぶスタイルができています。ドイツにはかなわないが、日本でもマイスター制度をつくって、ろくろや絵付けなどに30人単位で人材を養成する必要がある。

マイセンでは、古い道具類を残し、今も使っている。近年は筆を使うようになっているが、画一的な線であり、日本の表情ある線とは異なる。国民性の美意識の違いといえよう。しかし、現在の日本では、道具類をつくるものがないし、漆を搔きとる道具をつくる鍛冶屋さんもない。ろくろは重視しておらず、型を使っている。絵の具と土を重視しているが、色はマイセンに負けているかもしれない。

次世代の職人を育てる

作業場や家屋・庭は古風な佇まいで、江戸時代の風格を漂わせている。赤松の薪を括る紐は、竹からビニールに代わっている。窯を焚くのは年6回ほど、焼成の時間と温度は40~45時間、約1,300℃で、季節、その日の天候、窯積み次第でその都度焚き方は違って来る。歩留りは半分ほどである。

成型15人、窯焚き・仕上げ5人、下絵付け・上絵付け20人の職人がいて、定年は一応60歳となっている。最高齢は、黄綬褒章を受章した77歳の女性である。10人は、先代(13台)に鍛えられた職人たちで、50-60歳になり、14代を支えている。職人を育てて、15代に引き継ぎ、彼らが次代を担うことになる。



図3 柿右衛門窯の絵書座
注：写真は児島完二氏撮影。

濁手の作品は歩留りが2-3割と低い。絵付けは、20~30年でやっと一人前になる。器用な人よりも不器用な人が合っているようである。白無垢の状態で、絵付けの修行に入ってもらおう。椅子は使わず、床に座って作業する。12代で潰れかけたが、屋号を担保にして乗り切る。家屋・作業場などは、今の14代が建て直した。葺き^{あしぶ}の屋根は、200年近く経っているが、地元・佐賀の職人に葺き直してもらった。



図4 葺き屋根の柿右衛門窯
注：写真は児島完二氏撮影。

3.2 色鍋島の真摯な継承と今右衛門

—重要無形文化財・今泉今右衛門 前田 順三氏に聞く—

鍋島藩の御用赤絵師として高い格調・品格の色絵磁器＝色鍋島を創造

今泉今右衛門家は、江戸期より鍋島藩の御用赤絵師として最高の色鍋島をつくりあげた。色鍋島は、鍋島藩において献上品、城中御用品としてつくられ、精巧な技術、斬新な意匠、高い格調・品格を併せ持つ色絵磁器として、世界的に高い評価を得ている。

鍋島宗藩は藩一体となって御用窯の運営にあたり、藩主の命を受けた「陶器方役」の下ですぐれた陶工31人によって職制化され、御用赤絵屋をはじめ御用土伐等を配属した。本格的な藩窯として運営されたのは、1675年に大川内山に移窯した以後のことで、1871年の廃藩置県まで続いた。

赤絵付けの仕事は、当時、有田の赤絵町の今泉今右衛門家に委託され、その調査・技術は一子相伝の秘宝として保護されてきた。赤絵生地は、大川内山から有田赤絵町の今右衛門家に託送されてくる。御用赤絵屋の今右衛門家では、斎戒沐浴して色絵付けし、(鍋島藩の紋章入りの幔幕を張り巡らし、高張提灯を掲げ、藩吏の監督と保護の下で)赤絵窯を焚き続けたと伝えられている。最盛期は元禄前後といわれ、精巧な藍の染付に、中国の唐彩を手本にした色鍋島の赤・黄・緑の配色は、高い品格を限りなく温存している。

色鍋島の再興と創造の歩み

明治以降は、赤絵だけでなく生地からの一貫製作に取り組む。10~12代の3代かけて最盛期・色鍋島の復興に成功し、1971年に国の重要無形文化財の認定を受けた。ろくろによる成

型、染付の描き・濃み⁸⁾、柞灰による施釉、松木の薪による本窯焼成、赤絵の描き・濃みに至るすべての工程を、江戸期の手仕事に準じ継承している。

さらに、13代今右衛門は、色鍋島の世界に芸術性を加え、現代の色鍋島として吹墨・薄墨・緑地・吹重ねの技法を確立し、国の重要文化財保持者の認定を受けた。

各代が、それぞれの時代に真摯に取り組み鍋島の技術を継承する中で、新しい美意識を模索し、各時代の品格を追求してきた。故13代が殻を破って道を開いたことが、2002年に襲名の14代にとって非常に参考になっているという。

「墨はじき」の白抜き技法を駆使

13代の次男として1962年に生まれた14代今右衛門は、色鍋島の技術を継承するなか、江戸期から色鍋島に使われている白抜きの「墨はじき」に興味をひかれ、新しい技法として藍色・墨色・雪花・層々の各「墨はじき」技術を確立した⁹⁾。

「墨はじき」というのは、鍋島・古伊万里でよく使われた白抜きの技法である。まず、墨で文様を描き、その上を染付で濃む。すると墨に含まれている膠分^{にかわ}が、撥水剤の役目をして、墨で描いた部分の（染付）絵の具をはじく。その後、素焼きの窯で焼くと、墨が吹き飛び、白抜きの文様が現れるのである。鍋島では、「墨はじき」による白抜きを、主文様を引き立たせる脇役、いわば主文様の背景として使われることが多い。

8) 「濃み」とは、色付けをする（塗る）ことである。有田では昔から、絵柄を線で描く「線書」は男性、それに色付けをする「濃み」は女性、という分担ができていた。

9) 『色鍋島と今右衛門』今右衛門窯。



色絵椿つなぎ文変形皿 C今右衛門古陶磁美術館

図5 「墨はじき」の白抜き技法による14代の作品

注：14代今右衛門『墨はじき』による色鍋島の品格と格調より引用
(<http://www.imaemon.co.jp/ironabeshima/14daiimaemon/essay01.html>)

伝統の継承と職人

松木の薪で本窯を焚くのは、年に8回程である。職人は、ろくろ・型づくり10人、下絵付け15人、上絵付け10人の計35人である。男性が輪郭を描き、女性が塗るという江戸期から続く分業体制を敷いている。好景気時に入ってきた若者は定着も難しかったが、1990年代半ば以降の景気低迷が続くなか入ってきた若者は優秀で、当代はもちろん次の代を支えるであろうと期待できる職人に育ってきている。

母家は、有田の江戸・文政の大火の後、建てられた180年ほど前の建物で、赤く染まる瓦(図6)に御用赤絵師の面影を偲ばせている。

3.3 暮らしを楽しむ文様に生きる源右衛門窯 —源右衛門窯 取締役会長 館林 慶知氏に聞く—

『古伊万里』様式の系譜

伊万里・有田焼には、大きく分けて3つの様式があるが、その内の一つである「古伊万里」



図6 今右衛門の赤く染まった瓦
注:「今右衛門窯のご案内」(<http://www.imaemon.co.jp/guide/index.html>)より引用。

様式は、柿右衛門・鍋島系を除く幕末以前の伊万里・有田焼のすべてを含んだものである。

17世紀初めの「初期伊万里」は、白い磁肌と呉須の清楚な表情に魅力がある。17世紀中期には、オランダ東インド会社の手で伊万里・有田焼が海を渡り、17世紀末から18世紀初めにかけての豪華な文様美で飾られた「輸出伊万里」は、西洋人を驚嘆させた。1757年に東インド会社への正式な輸出が途絶えてからは、「国内伊万里」へと転換し、海外向けの華やかな色絵の大壺や大皿にかわって、ブルーが美しい染付けの小皿や茶碗など国内向けの食器類が生産の主流になった。以来、「古伊万里」は、会席料理など日本独自の食文化の発展に寄与し、陶器や漆器とは異なる機能性と文様美で、食卓に彩を添えてきた。

その後、磁器製造技術の流出、1828年の「有田千軒の大火」による壊滅的打撃と職人の流出もあり、江戸後期から幕末にかけて有田の市場独占が崩れ、「古伊万里」は次第に、本来の美と輝きと活力を失っていくのである。

源右衛門様式による「古伊万里」の再興と創造

源右衛門窯が有田の是米木に築かれて、約260年になる。「古伊万里」の民窯として受け継がれ、それぞれの時代に生きる人間の暮らしの感性に深く入り込む美をつくりだすことに務めながら、その伝統を継承してきた。

5代・館林源右衛門は、従来の技法と意匠を改良し工芸技術品製造の指定窯として、第2次大戦中も有田焼の伝統を厳守してきた。

そして、戦後の混乱期を乗り越え、6代源右衛門(1927～89年)は、料亭洋食器や工芸品製作で培った伝統技法をさらに広げ、新たな地平に立って日常の家庭食器からの出発を果たし、「古伊万里」の再興を図りつつ、より豊かな暮らしの提案を精力的に展開していった¹⁰⁾。

1970年にヨーロッパを探訪した6代源右衛門は、「輸出伊万里」の美を現地で再発見する。先人陶工たちの技と情熱に感銘し、現代の暮らしにフィットする源右衛門様式の「古伊万里」として新しい生命を吹き込み、よみがえらせたのである。先代(6代)のたくましい先取開発の気風は、米国ティファニー社との共同開発など異業種企業との連携にも、成果をおさめてきた¹¹⁾。

作家としては先代(6代)でピリオドを打ち、現在は源右衛門窯のブランドで勝負すべく、いろいろなものをつくって楽しみを提供することをめざしている。生活様式、暮らし方は、ずいぶん変化し様変わりの様相を呈している。昭和の時代は「揃える時代」で、家を建て、調度品を揃えた。平成の時代は、生活が忙しくなるなか

10) 『源右衛門窯』源右衛門窯。

11) 「源右衛門窯―工房に息づく古伊万里の心」(<http://www.gen-emon.co.jp/about/history.html>)。

「楽しむ時代」になっている。

「古伊万里」様式に独自の現代的アレンジを施した作風は広く知られ、洗練された優美な文様は幅広い層に人気がある。源コレクションとして、13社でグループをつくり、東京・京都の織物2社、シャンドリアではSUNYOW、万年筆はセーラー、などと組み、布製品とやきもの、金属とやきものなどを組み合わせたの文様を提供している。蘭帳マットやテーブルクロス、さらにステッキなど、組み合わせは無限に広がる。多品種用ロットを旨とし、絵付けはすべて手作業である。

21世紀を迎えて、源右衛門窯では、「古伊万里」を創った江戸陶工の精神の高みと技法、そして6代・源右衛門の思いを受け継ぎ、時代と暮らしを直視した磁器の機能美を追求している。日常食器からインテリア・工芸品まで幅広い新作を開発するとともに、ハンガリーの名窯ヘレンドとのコラボレーションや、磁製万華鏡、磁製万年筆など新分野にも挑戦し、「古伊



図7 源右衛門窯の佇まい（煙突と薪）

注：写真は児島完二氏撮影。

万里」の美の創出をめざしている。

松木の薪で焚いた窯は、不純物の入り込んだあまいさが自然の安らぎを与えてくれる。化学的にきれいにつくるとか鮮やかにするのは簡

単であるのに対し、歩留りも悪いが、意地で維持しているという。単窯では、石炭、重油、薪をすべて使う。登り窯は年4回焚く。軽油バーナーで温め、攻めは薪で、焼き上げは石炭を使う。2晩徹夜で40時間近く炊く。職人は、成型10人、染付40人、窯場10人など、計80人。出荷額は12億円。

4 有田の伝統とまちづくり

4.1 有田の産業観光とまちづくり

一有田観光情報センター・事務局長の筒井孝司氏に聞く一

有田町の沿革

現在の有田町は、旧有田町12千人と西有田町九千人（農業主体）が2006年に合併して誕生したものである。有田は、1616年に朝鮮人陶工の李参平らによって泉山に陶石が発見され、日本で初めて磁器が焼かれた発祥の地である。以来、谷あいには「有田千軒」と呼ばれる街並みが形成され繁栄をきわめたが、江戸時代の内山の大火によってほとんどの家が焼失した。現在の有田の街並みはそれ以降のものであるが、歴史的価値の高い建造物が数多く残っており、1991年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されている。

有田はまた、岳地区の棚田が「日本の棚田百選」に選ばれるなどの景観を有する稲作地で、県下有数の畜産地でもあり、有田焼の「器」と農業の「食」の魅力を堪能できるまちでもある。町としておもてなしの体制をとれるようになったのは、ここ10数年のことで、それ以前は土日あまり開いていなかった。

「食と器の交響詩」をめざす有田観光事業

「食と器の交響詩」をテーマに、新生有田の観光事業推進のための拠点として2009年7月

に設立されたのが、有田観光情報センターである。事務局長の筒井孝司氏は、大有田焼振興協同組合に30年間従事し、11年間専務をやってこられた方である。

大有田焼振興協同組合は、地域のメーカー、商社の4組合が大合同し商工の窓口として、1979年に発足した。当時は、第2次石油危機により厳しい状況下に追い込まれていた。産地振興法ができ近隣の2市5町村が特定不況地域の対象となるなか、一致団結して不況を乗り越えるべく（また補助金の受け皿として）発足したものである。2009年には解散を余儀なくされるが、発足母体の各組合（および組合員）の状況が厳しくなり、支えきれなくなったからとみられる。

業界内および行政とのつなぎ役として活躍された筒井氏は、音楽にも造詣が深く、地元の焼き物と音楽を結びつけての創意的な活動を進めてこられた。2002年から「有田磁器の音コンサート」を開催し、磁器太鼓や碗琴など有田焼のお碗を使っての演奏は8年間で250回に及ぶ。筒井氏による碗琴の実演が、2010年12月16日のテレビ番組「あさいチ」で有田特産の一つとして紹介されていたが、各種イベントで活躍するなど人気も高い。6年前には、有田とマイセンの姉妹都市提携25周年を記念して、2003-4年にかけてドイツに出かけ演奏している。

4月29日から5月5日に開催される恒例の陶器市には、100-115万人が訪れる。有田への観光客は年間230万人で、その半分近くが陶器市に集中しているわけで、いかに通年の集客を図っていくかが課題である。通年集客促進事業として、秋（11月下旬）の有田陶磁器まつり、2-3月の有田雛のやきものまつりに力を入れている。2-3月には、ノベルティ研究会製作の磁

器製雛人形が展示される。なお、観光客が昼間だけしかいない、歩いてまちを楽しめない状況を打開すべく、窯元コンサートなど夜のイベント開催、宿泊施設の整備、歩道の整備などが課題となっている。

4.2 女性による有田まちづくりの創意的な活動

一有田町づくり女性懇話会 会長 西山美穂子氏に聞く一

有田町づくり女性懇話会の発足

「有田町づくり女性懇話会」は、2003年1月に女性4人で立ち上げた。4人が、やる気のある人に声をかけ、少しずつ増やしてきた。今では、30人（実働12人）を数え、体力も自由もある60代のメンバーが中心になっている。

1市2町の合併について勉強会を開くなか、会のあり方についても話し合い、「私たちのまちは、観光に弱いよね」ということから、女性の視点から町づくりを提言していくことにした。街並みは「ウナギの寝床」といわれるように5キロと長いのが、コアになるところがない。そこで、地域を限定して取り組み、現在は伝統的建造物保存地区の空き家、空き店舗などを生かして、観光面から地域のにぎわいを生み出すための企画、運営を行っている。

1年を通していろんなことをやっていこうということで、懇話会では次の9点を中心に活動している。

- ① 雛のやきものまつり（2-3月）
- ② 町家・坪庭の牡丹を愛でる会（4月）
- ③ 町の歳時と行事食の研究（年間）
- ④ ほたるみにきん祭（5月末～6月）
- ⑤ 空き棚田を使っての芋づくり（6-8月）
- ⑥ 高校生によるウィンドウディスプレイコンテスト（7月末～8月初め）

- ⑦ トンバイ夜市（8月14日，旧盆）
- ⑧ おしゃべり小路庵（毎月）
- ⑨ 秋の陶磁器まつり（11月23日から5日間）

有田雛のやきものまつり（2-3月）

「有田らしい雛まつりをやりたい!」ということで、「陶磁器製の7段雛飾り」が有田に最もふさわしいと提言し，製作嘆願書を書いて窯業技術センターに提出した。業界からは常識との批判を浴びたが，翌年の2005年春に第1号が完成し，第1回「有田雛のやきものまつり」が開催された。その後，官民共同で大型の雛人形を3年がかりで製作するプロジェクトがスタートする。毎年2段ずつつくっていくというもので，山徳，香蘭社，源右衛門，畑萬陶苑が製作を担当した。こうして結実した陶磁器製の見事な7段雛飾り（図8）が，私たちを迎えてくれたのである。



図8 陶磁器製の7段雛飾り
注：写真は児島完二氏撮影。

人形づくりは毎年発展し，2009年は柿右衛門とマイセンの雛人形が登場し，2010年にはスペインのリアドロ社の雛人形も並んだ（図

9）。

今年で6回目を数える雛まつりは，2月11日～3月22日の40日間に2万人が訪れるイベントになっている。空き店舗を利用した観光案内所，物産販売所，ミニギャラリーを開設しており，おばあちゃん手づくりの色とりどりのさげもんも並べられている。雛のやきものまつりは，有田町に運営を委ねており，韓国，台湾，中国からの来客も増えて，語学の文化講座も開かれている。

女性懇話会の提案した雛まつりは，有田らしい新たな行事として定着しつつあり，また陶磁器製の雛人形づくりはノベルティの産業と技術の新たな試みとしても注目される。



図9 マイセン（左）・柿右衛門（中央）・リアドロ（右）の陶磁器製雛人形
注：写真は児島完二氏撮影。

町家・坪庭の牡丹を愛でる会（4月）

2009年4月に開催した「町家・坪庭の牡丹を愛でる会」は，イベントの中心地から離れた地域で頑張っているお店を元気にしようと，400本の牡丹が咲く坪庭のエリアで実験的に始めたものである。参加費3,500円で20名限定とし，料理は牡丹をイメージしたもので，使った皿はお持ち帰りできる。食後は，若店主夫人による「お茶の美味しい淹れ方」の講座と実技が組み

生まれ、「次回も楽しみ」と好評とのことである。

小路庵でのおもてなし（毎月＋春秋）

有田には、しっとりした食事処がない。そこで空き家（1925年建造の町家）があったので、小路庵を開いてもてなしている。地域でとれる旬の食材を使った料理を心がけ、雛まつりには「雛ご膳」を提供している。また、月に1回、内山地区の独居老人を招いて、会員手づくりの食事会と近郊へのピクニックや買物を楽しんでもらうようにしている。県からの補助（3年間）も出るようになり、フルに活用している。

秋の陶磁器まつりでは、小路庵で期間限定の「おくんち御膳」を出している。懇話会が発案した「おくんち御膳」を町内の飲食店にも呼びかけ、当初は5店舗の参加だったが、6年間で19店舗に広がり、食の面でも充実してきた。

町の歳時と行事食の研究（年間）

地域に伝えられている季節の行事とそれにちなんだ料理を掘り起こそうと、商店街の人を中心に呼びかけ、昔の話をしてもらい、実際に料理を再現する作業をした。その一例が、5月端午の「筍干盛り」である。今では、つくる家も少なくなっているが、昔は筍干盛り用の皿もあったそうである。将来、小路庵でこうした料理を楽しむ会を開きたいとのことである。

ほたるみにきん祭（5月末～6月）

商店街の裏の川べりでみられる蛍を觀賞しながら、コンサートをしたり、会員中心のミニ屋台などを出したりする催しである。観光客誘致のためにと始めたものであるが、孫を連れて地元のおじいちゃん、おばあちゃん、若い両親などでにぎわい、今ではすっかり地域の祭りになっている。本格的なライブの他に、読み聞かせの会も開かれ、気軽に立ち寄って待つ親子連れも目立つ。

町の中心部から少し離れていて、日に千人ほど訪れる小さな祭りではあるが、昔懐かしい温もりのある祭りになっている。

高校生によるウィンドウディスプレイコンテスト（7月末～8月初め）

夏場の集客が難しい時期を逆にとらえ、若者に参加してもらえるイベントとして企画されたものである。2009年は近県にも呼びかけ、6校から14チームの高校生が参加して、約2kmにわたり内山地区の商店街のウィンドウを飾ってもらった。30店舗を目標に、夏のビッグイベントに育て上げるべく、2010年は1年前から案を練っているという。

いろいろな試みの中には、失敗例もみられる。その一つが、地元商店街の企画に協力して、屋台などを出店するという「トンバイ夜市」（8月）である。お盆の時期と重なり、女性は何かと忙しいためスタッフが揃わず、商店街の足並みも乱れて、頓挫を余儀なくされた。「空き棚田を利用したの芋づくり」（7月）のケースも、頓挫を余儀なくされた例である。有機栽培農家とのコミュニケーションを始め、収穫後は秋の陶磁器まつりで焼き芋にして販売しようという企画であったが、10km先の、真夏の草取り作業などが体に応え、昨年からはギブアップしているという。

温もりある住みやすいまちづくり

女性懇話会の提案と活動は、すべてが順調というわけではない。しかし、女性らしい感性と温かみが込められた創意的な活動は、陶磁器業界や行政をはじめ、地域のお年寄りや若者たちをも巻き込みつつ、温もりあるまち、住みやすいまち、誇りをもって観光客をおもてなしで楽しんでもらうまちづくりへと展開しつつある。

4.3 伝統保存とまちづくり

—有田町歴史民俗資料館・尾崎葉子館長に聞く—

行政による歴史的街並み保存

街並み保存は、住民の了承のうえで行政主導に進められている。日本ナショナルトラストの調査が契機となり、現在は文化財課が管理している。店舗や一般住宅など152軒が対象になっていて、ファザードなど目に見えるところに600万円（上限）の工事費の援助がある。1991年から修復作業がスタートし、最近では年平均5軒のペースで修復され、現在では6割弱の86件が修復を終えている。

楽しみながらの歴史的街並み探索イベント

異人館は、有田の豪商、田代助作が1876年に外国商人の宿泊施設として建築した和洋折衷の建物である。中にはラセン階段があるなど、当時としては画期的なデザインであった。雛まつりの期間中は、（毎年ではないが）金、土、日に開館されている。

内山地区を対象にコミュニティ・ミュージアム助成で、150年前の地図を持って歩くというイベントが行われた。地図は、2枚重ねになっていて、現在の地図を下側に敷き、その上に150年前の透明地図を重ねて、比較しながら見られるように工夫された優れものとのこと。小学生から70代まで54人が参加し、大いに楽しむなど予想を超える盛り上がりがあった。町民が主役になって、楽しみながらのまちづくりができれば、それに勝るものはない。私たちは、そのお手伝いをするもの、と尾崎氏は力を込めて語る。

やきものづくりの伝統様式とその保存

「有田の3右衛門」はそれぞれ、柿右衛門様式（柿右衛門）・鍋島様式（今右衛門）・古伊万里様式（源右衛門）と、つくり方に伝統的な独

自の様式をもっている。そのうち、柿右衛門は個人および工房が、今右衛門は工房が（「保持団体」として）、国の重要無形文化財に認定されている¹²⁾。

1916年の創業300年には、李参平の顕彰碑を建てており、陶磁器品評会として開催の九州陶磁展は、やきものづくりの登竜門となった。

有田皿山は、かつて野猿が鳴く山といわれた。磁器が発見されると、一つの山が400年近くかけてやきものに変ったところとして、泉山陶石場は有田磁器の原点となった。泉山の石は硫化鉄を含んでいるが、当時は脱炭処理ができなかった。

5 伊万里の産業振興とまちづくり

—有田燭萬陶苑にみる創意的経営と鍋島焼再興への思い—

まつりと陶板弁当

2月7日～3月2日に開催される伊万里の雛まつりは、有田の1年後から始めた。山桜の映える春の桜まつりは4月1日～5日、風鈴まつりは6月20日～8月31日、藩葉の秋祭りは11月1日～5日、と四季折々に催しを開いている。

祭りには1個3,500円の陶板弁当をつくっており、1個1,000円の利益が出るようにしている。窯元30軒に公募して、100食分（=100枚）の陶板容器の新作を安く焼いてもらい、1

12) 文化庁では、無形文化財としての赤絵技術を保存し、後継の工人たちを養成する主旨の下に、酒井田柿右衛門家、今泉今右衛門家の両工房内に技術保存会の組織化を指導した。そのため、両家の技術保存会の代表者である13代今泉今右衛門と14代酒井田柿右衛門は、国の重要無形文化財として総合指定を受けた（永竹 威、前掲書、145-6ページ）。

枚700円で物納してもらおう。絵皿を集めたがる客も出てきて、プレミアムが付く。地域デザインも織り込み、窯元の特徴を宣伝する。

磁器風鈴には、五感との出会いがある。鳴り茶碗はキーンという金属音がするが、磁器風鈴は大きさで音色が異なり、絵柄も楽しめる。記念品に使うとの申し出があり、期間中に1万個納めたこともある。

光るアイデア製品

土を薄くし透光性あるマルチファンクション・ランプは、アロマの香りが漂い(LEDの)7色に変わる優れもので2年前につくり、世界初の癒しの彫刻磁器照明として評価された。そのオリジナルなものは20年前につくって通産大臣賞を受賞しており、LEDによるバージョンアップを図ったのが今回の製品である。

ペットの骨壺は通常、部屋に置きたくないものであるが、従来の上から入れるものと違って下から入れるタイプで、誰が来ても違和感がないものになっている。



図10 畑萬陶苑にて畑石真嗣社長(右端)の語り
注:写真は児島完二氏の提供による。

手仕事と直販

産地問屋・商社経由の流通では、家内業はやっていけなくなっている。手仕事と大量生産は、合わない。しかし、流通改革をしようとする

と、流通業者からの非買運動で身動きがとれなくなるというリスクも伴う。直接販売に切り替えるのは、ハイリスクの試みである。それゆえ、十分に準備し勝算を立ててから、直販に切り替えた。直販の利益率は、(業者経由に対して)当初5:5であったが、7-8年前に7:3に、最近では9:1にまで高まっている。

もの「語り」づくりとリーダー育成

藩葉秋祭りの仕掛けをして、20年経つ。九州各県知事・市長・大使館に火おこし、たいまつ、磁器品を献上してきた。

5年ほど前からは、九州をはじめ全国の「お城めぐりをしよう」ということになり、実施している。これまで、小倉城、熊本城、姫路城、島原城、彦根城と回り、今年は大分県杵築城へ柵を付けて献上に行った。助成金はゼロで積立金にてまかなっていることもあり、2年ごとに遠方に出かけることにしている。

歴史文化の再現を図るべく、同じものを2本つくり、1本は残す。登り窯で焼くなど手仕事でコストもかかるが値をつけず、財産として残す。大川内山振興協議会の窯元30社のうち、登り窯には15社が参画している。話題づくりによりマスコミを動かすとともに、地域興しのリーダー育成を図ったものである。「目標があってこそ頑張れるから」という。「30年後には、半世紀におよぶ“献上の歩み展”を出したい」。畑石社長の目は、30年後も見据えているのである。

伊万里・鍋島焼協同組合では、組合費用を売り場のエリアと店舗面積で算定している。飲食店をどう整備するかが課題である。大川内山振興協議会は、人材を育てることに重点を置いており、事務は組合がやっている。伊万里商工会議所も、伝統様式による洋食器の開発を支援しており、勉強も兼ねて幅が広がるし、香炉や壺

は創造性を掻き立てる。物語をつくる必要があり、何が残せるかという挑戦が大切で、素材が変わってもいいと思っている。「地域は人である」と考えており、5-10年後に残れるかが問われる。

鍋島焼の現代的再興

鍋島焼は、写実性の自然美に特徴がある。日本の花は季節感があるが、洋花は季節感が薄い。近年では洋花も生活の中では当たり前になっている。鍋島様式を、過去から現代にいかに関承するか、何が残せるかを考えている。鍋島焼には、品格がある。デザイン性に優れ、遠近法が取り入れられていて、主役と脇役がある。

後継者の子どもたちが、窯業学校に行き始めている。畑石氏自身、有田窯業大学校を24歳で出て、東京造形大学に入り、ろくろを通して平面を立体化することを学んだ。

ノベルティづくりへの挑戦

磁器製ひな祭りのお雛様は、有田では畑萬が初めてつくったものである。20年前のことで、その頃からノベルティをつくっているが、量産をせずに、付加価値をつけることに専念している。数をつくる時代ではない。手を抜かないことをモットーにしている。原型は、社長自らがつくっているが、パーツは1製品あたり5-6個で、外注に回すことも少なくない。発注先は、主として波佐見地区（長崎県）の型屋さんである。

伊万里香水ビンとファンづくり

香水ビンについても、伝統文様とニューデザインを結合した「伊万里香水ビン」をつくっている。フランスでは2兆円産業であるが、容器はガラス製である。そこで、磁器製に挑戦している。磁器製の蓋は大変難しいが、栓式にし、自重で下に落ちる作用でしっかり密閉できるように工夫を凝らしている。1回で5個づくり、

1個は香水用、4個は飾り用としている。すでに、文様で60種類、形では10数種類つくっており、やきものコレクターには、1個8万円で売れる。化粧筆とのコラボも考えている。話題になり、香水メーカーからも注文が来ている。

香水ピンは、発想に3年かかり、つくり始めて2-3年になる。香りを出すペンダントは、バカ受けした。ピアカップは彫刻技術を生かし、泡が消えないカップとして注目されている。固定観念を外すのが大切で、産業と伝統芸術を結びつけ、次なる伝統工芸に挑戦しつつ、後継者を育て新たなファンをつくっていく。

世界の畑萬をめざして

20年前に「世界の畑萬」を掲げ、やってきた。生地と型に手間暇をかけ、加飾は控え目にする。良いものを見せ、シャワー効果を出し、価格は少しずつ落としていく。

卸先がゼロでは難しいので、デパートのプロパー用、専門店、商社直売の団地1社など5社に卸している。小売りでは、銀座の和光にのみ買い取り方式で置いている。

職人は、上絵付け5人、染付10人、窯・生地5人で、年齢構成から見ると20代が10人と多く、50代に2人いる。20代で独立するものもいる。下絵付けは、男性5人に対し女性15人と多い。

現在は、ガス窯で焼いている。ガス窯は、手仕事と時短をさばけさせる方法として、12年前に導入した。40m³の電気窯では、直接火がかかるところは空にしている、3m³分しか入れない。有田では20時間かけて1,300℃で焼いているが、ここでは24時間かけ1,320℃まで上げる。磁器の白さ、光沢、丈夫さが違ってくるからである。

登り窯の炎が織りなす世界

少し余談になるが、2010年1月24日に放映

された「アインシュタインの眼—陶器の炎—」(NHKハイビジョン)は、実に興味深く得がたい番組であったので、ここに紹介したい。世界で初めての撮影とのことで、登り窯の中で「炎の龍が器をなめる」ごとく炎が織りなす変化のプロセスとその妙を映し出した。炎の色を観察すると温度がわかるといわれるが、ハイビジョンカメラがそれを活写する。

暗く赤い炎では器に変化なく、オレンジの炎で器が赤くなり、千度を超えると明るいオレンジになって器は白く発光する。千度を超えると、本焼のプロセスに入り、釉薬にも変化が出てくる。黒っぽい色から赤っぽい小豆色に、さらにグレーになると化学変化が起こり器の表面は黒いツルツルした感じになる。釉薬が溶け始める温度は1,200℃とのことで、光が反射するなど器に大きな変化が起こり、釉薬のガラス化が進む。火入れから31時間で、1,300℃の世界に入り、灰色の釉薬は艶のある白になる。火入れから35時間、灰や土がガラス質に変わり、まもなく終わりを迎える。

「炎が生み出した偶然の美」、まさにそれが陶器の世界で、よりコントロールされた磁器の世界との対照をなす。

創造的経営と地域との共生

創造的経営には近年、地域をどうデザインしていくかという視点が必要になっている、と畑石氏はみる。売り手と買い手の関係もタテ型でなくヨコ型が、また地域のために利益を分配していくという視点が求められるようになっている。

売り先が食器向けばかりというのも、売り手の視点が硬直的になっている故かもしれない。切り口を変え、チャンネルを変えて、化粧、建築・照明向けなどへと広げていく必要がある。

後継者の育成が叫ばれているが、社長さんた

ちトップリーダーの勉強会がむしろ必要になっているという。経営者自身も、「つukれない」経営者から「つくる」経営者へとシフトしつつある。自らがデザインするなど現場的な感性を不断に磨いていないと、どういう方向に経営を舵取りするかがつかめないし、後継者への適切な指導もできないからである。

6 おわりに

2010年3月3~4日の有田・伊万里調査では、短期間ながらも10ヶ所に及ぶ見学・聞き取り調査を行うことができた。小論では、その内の8か所(9人)を取り上げている。出かける直前に、食中りでお腹を壊すというハプニングに見舞われ、果たして調査ができるかと心配したが、窓口の百武龍太郎氏をはじめ訪問する先々で元気あふれるパワーをいただき、乗り切ることができた。

いただいたパワーとご教示を糧にしてまとめたのが、小論である。その抜刷(小冊子)を関係者にお贈りし、何らかの示唆と勇気をお返しできればと願っている。

最初の訪問先の佐賀県陶磁器工業協同組合では、半世紀におよぶ歩みと今日の厳しい状況についてお伺いした。共販・集金システムにみるユニークな工夫は、産地振興にも大きな役割を果たしてきたが、需要の減少や輸入増加など需給環境が激変し、直販やインターネット販売なども広がるなか、新たな対応を迫られている。それに向けて努力されている様子も、うかがうことができた。

柿右衛門をはじめ3右衛門への面談が適ったことは、大変有難かった。それぞれが独自の考え方ややり方をもって、伝統を継承しつつ現代さらに未来にいかにかに生きるか、追究されている

ご様子を直接伺うことができた。

14代柿右衛門氏から伝わってくる、深い伝統と様式を担う責務の重大性と、その中で培われた深い哲学と気品。また、伝統との格闘の中で培われた、今右衛門・前田順三氏の凛としたお姿と息遣い。伝統の窯として生きつつ、もう少し自由な生活提案の創作領域に軸足を置かれる源右衛門窯の館林慶知氏。それぞれ三者三様の歩み方を比較する機会を得ることができた。また柿右衛門窯では、相談役の酒井田正宏氏に窯場や作業場など敷地内の見学をさせていただき、懇切丁寧な説明に耳を傾けつつ歴史的な時間空間を味わうことができた。

一方、創造型経営の維持・発展と伊万里の伝統再生の二兎を追う畑萬陶苑は、創造なくして未来に道なし、を日夜徹底して実践されている。畑石真嗣氏のバイタリティあふれる創造性と魅力的な語り、引きこまれてしまい時間を忘れる。マルチファンクション・ランプや下から入れるペットの骨壺、陶板弁当、磁器風鈴、磁器製ビールグラス、そして伊万里再生に向けた壮大な思いやプランなどなど。

柿右衛門と畑萬陶苑。この両者は、対照的な歩みのようにみえるが、伝統の継承・発展という深部ではむしろ極めて近いのではと感じた。

まちづくりと産業観光では、筒井孝司氏および西山美穂子氏、尾崎葉子氏から、実に興味深いお話を拝聴することができた。筒井氏にみる音楽性および国際性、そして行政・地域・業界への経験知の深さ、それを観光情報センターの新生に傾注されているご様子が印象に残っている。

西山氏の、美しい着物姿は伝統の街並みに映えていたが、まちづくりへの創意的かつガッツあふれる行動力とボランティア精神にも、頭が下がる。尾崎氏の歴史的な含蓄のある語りも魅

力的で、お二人にみるような女性パワーが、有田のまちづくりに大きなインパクトをもたらすのではと感じた。

3月4日9時にお伺いした伊万里歴史民俗資料館は、10時からの開館で責任者もみえていなかったが、見学させていただいた。また、佐賀県立九州陶磁文化館では学芸員の家田淳一氏から丁寧な説明をいただき、伊万里・有田のやきものの歴史をより広い視点から学ぶことができた。

以上、限られた時間の中ではあったが、盛り沢山の見学・聞き取り調査を行うことができた。面談していただいた方々、および斡旋していただいた百武氏に、心からお礼申し上げる。

すぐにまとめたいとの思いに駆られつつも、諸事情が重なり、なかなか手がつけられず、半年余を経てのまとめを余儀なくされた。そうした非礼にもかかわらず、関係者の方々には、草稿をお送りして再度のご教示をお願いすると、早速にご覧のうえ電話および電子メールなどで確認・再ヒアリングをさせていただき、何とか小論にまとめることができた。関係者の皆様には、重ね重ねお礼申し上げたい。

【補論】 まちづくりと行政のあり方を考える

2010年3月の現地調査から半年後の10月、遅ればせながら急ぎ書き上げた草稿を関係者の方々にお送りし、それに基づき電話・電子メールで確認し再聴取もさせていただいた。その際、気になったのは、有田のまちづくり関係者、とくにこれまで地道にまちづくりを進めてこられた方々の深いため息である。

その一つに、小路庵（1925年建造の空き家）をめぐる行政とまちづくり女性懇話会とのすれ

違いがある。小路庵は、春秋のイベントや独居老人などのおもてなしの拠りどころとして、女性懇話会では重宝にしてきたところである。ところが、町に寄付されてからは、長期間にわたる厨房の修理で秋のイベントに間に合わず、また「町民に公平に」などの理由で利用も難しくなり、困り果てている。これまで協力的であった行政の関係者も何かと歯切れが悪くなり、とまどっているとのこと。

そうした背景には、2010年4月に行政のトップが代わり、大手資本を巻き込んでのまちづくりへと行政のかじ取りが大きく変化したことがあるようである。「もう活動をやめようか」と何度も考えたという。しかし、「こんなことで挫けてはいけない」と思い直し、新町長などをお招きして、まちづくり活動の一部である「おくんち御膳」などを紹介しながらおもてなしをした。すると、「見るのと聞くのは大違い！ここまでやっていたのか」と認識を新たにしていたとのこと。これまで、行政関係者には女性懇話会の活動を逐一報告してきたので、行政のトップや町民への理解も進んでいるとばかり思っていたが、そうではなかったのかもという。

そこには、まちづくりの主役は誰か、行政とは何か、行政はどうあるべきかという基本的な問題が提起されているとみられる。

行政とは、立法・司法以外の統治または国政に関わるサービスである¹³⁾。地域の行政を

13) 行政とは、「国家作用の一つ。立法・司法以外の統治または国政作用の総称」(『広辞苑』)である。なお、「作用」と深く関わるキーワードに「サービス」がある。サービスとは、「ある使用価値の有用な作用」(『資本論』第1巻第5章)である。まさに、行政とは国家によるサービスに他ならない。

担う地方自治体には、地域的共同業務の執行および全国的な統治機構の末端組織としての機能という2つの役割がある。地域的共同業務の根本に位置するのが、地域の相互扶助機能である¹⁴⁾。

都会だけでなく農村においても「孤独死」が増えるなど人間関係の希薄化が進むなか、限られた財政の中で地域の相互扶助機能をいかに高めるかが問われている。地域の行政を担う職員には、住民との協働による行政運営を基本に、住民が主役であるとの認識をもって、地域に関する情報等を住民と共有し、政策形成を進めていくことが求められる¹⁵⁾。

まちづくりの主役は町民で、それを手伝い支援するのが行政のはずである。行政に関わる有田の人たちにも、そうした配慮と共感が少なくないようである。「町民が主役になって、楽しみながらのまちづくりができれば、それに勝るものはない。私たちは、そのお手伝いをするもの」(尾崎葉子氏)といった声が聞かれるし、「現場を大切にすることが、地域おこしの鉄則である。汗と手間を惜しまず地道に活動を続けるところが、まちづくりを引っ張っている」(筒井孝司氏)との理解もみられる。

まちづくりには、10-20年といった長期的な視点と粘り強い活動が必要である。伝統ある小さな町には、性急な成果を求める大手営利資本の活動はなじみにくい。地道な町民たちの活動と新参の大手資本、そのいずれを大事にすべきか、行政の品格を問う試金石となるであろう。行政には、「まちづくりの宝」の意欲をそぐよ

14) 「特集 FUTURA シンポジウム」における保母武彦氏のコメント(『九州国際大学経営経済論集』第16巻第12号、2010年1月)。

15) 岐阜県瑞浪市「職員人材育成基本方針」瑞浪市。

うなやり方ではなく、長い目で温かく見守り支える度量と見識が求められる。

〈資料一覧〉

資料1 調査の依頼・お礼文

1-1 佐賀県陶磁器工業協同組合（専務理事・百武龍太郎氏）への調査依頼文

有田焼（および伊万里焼）の産業振興とまちづくりの調査について、お電話や電子メールで懇切丁寧なご教示を賜り、大変有難ううれしく存じます。いただきましたアドバイスに基づき、下記のように調査要領をまとめました。

各見学予定先の皆様にもご覧いただければ幸いです。

-
- 1 調査日時 : 2010年3月3~4日
 - 2 調査テーマ: 有田焼（および伊万里焼）の産業振興とまちづくり
 - 3 調査者 : サステイナブル産業・地域研究会（下記の5名）
名古屋学院大学経済学部教授 木船久雄
同上 児島完二
同上 十名直喜
(窓口)
神戸大学経済学部教授 柳川 隆
名城大学経済学部教授 李 秀澈

4 見学・ヒアリング調査スケジュール

3月3日（水）

有田駅着（9：54）

10：00-10：50 佐賀県陶磁器工業協同組合 百武専務理事との面談（0955-42-3164）

有田焼の産業動向, 直面する課題と方策, 産業観光, やきもの文化発信

〈移動10分〉

11：00-11：30 14代酒井田柿右衛門との面談（岩崎支配人 0955-43-2267）

伝統の継承と現代産業のあり方についての思い（『余白の美 酒井田柿右衛門』）

11：30-12：00 柿右衛門窯の見学（岩崎支配人 0955-43-2267）

12：00-13：00 昼食（雛御膳）

13：00-13：40 有田観光情報センター 筒井事務局長との面談

産業観光とまちづくり, 陶磁器と農業(陶と農, 陶と食) の結びつけ

13：40-14：00

14：00-14：40 有田館にて有田まちづくり女性懇話会 西山美穂子会長との面談および歴史民俗資料館 尾崎館長との面談

まちづくりと女性パワー, 有田ひな祭り, 伝統的な景観保存とまちづくり他

14：40-15：00 有田館近辺の散策

〈伊万里大川内山への移動20分〉

15：20-16：20 畑萬陶苑 畑石社長との面談

伊万里焼の経営と産業動向, 産業観光とまちづくり

大川内山近辺の散策

伊万里（伊万里グランドホテル）にて宿泊

3月4日（木）

9：00 ホテル出発（タクシー）、伊万里港資料館の見学

10：00 佐賀県陶磁器工業協同組合 着
午前中：源右衛門窯, 今右衛門窯を見学
工場見学, 生産と経営のあり方, 産業振興とまちづくり

昼食

九州陶磁文化館の見学

熊本へ

資料収集

なお、貴重な調査の機会となりますので、何らかの形でまとめたく考えています。パンフレットや統計表・メモなどの資料をいただければ、大変有難く存じます。出来ますれば、各資料5部お願いできれば幸いです。

1.2 14代酒井田柿右衛門氏への面談依頼文

私どもサステイナブル産業・地域研究会（大学教員5名）は、3月3日に「有田やきもの産業振興とまちづくり」調査を行います。

佐賀県陶磁器工業協同組合の百武専務理事を窓口、有田観光情報センター、有田まちづくり懇話会などのご協力で見学調査をさせていただく予定です。その際に、柿右衛門窯だけでなく14代にぜひお目にかかり、伝統と創造のなりわいの妙と相克についてご教示を賜ることができれば願っています。

先日（2月10日）、岩崎支配人にお電話する機会を得、14代のご健康とスケジュールをふまえ半時間ほど（11時～11時半頃）お話をお伺いするというので段取りをさせていただきました。お話を伺った後、貴窯を見学させていただければ有難く存じます。

小生は、現代産業論・ものづくり経済論を「専門」にしており、鉄鋼産業研究を軸に最近陶磁器産業にも関心を寄せています。14代のご高著（『余白の美 酒井田柿右衛門』）に深く共鳴し、瀬戸の陶磁器（ノベルティ）をモデルにした拙著（『現代産業に生きる技―「型」と創造のダイナミズム― 勁草書房、2008年）にも、いくつか引用もさせていただいています。

「余白の美」は、実に優れたキーワードで、

伝統的な日本文化の特徴をなすシンプルな型の文化の精髓に位置すると考えます。英語にもSimple is the bestといったことわざがありますが、有形・無形にわたり広く深く貫徹しているところに日本の固有性があるように思います。

マイセンと有田（いわゆる日欧）の対照性を、「筆の線の表情」にアクセントを置いての「線の世界」にみられている点は、印象的です。また、素地とくに「白の表情の豊かさ」に両者の違いをみられている点も興味深いものがあります。

ものづくりを設計情報の「転写」と捉える議論があります。ご高著では、器を「情報」とみつつ、原材料に「一味もふた味も加える」とのご指摘もあります。これは、単なる転写ではなく、「創造的転写」とみることができるようになります。

今日のように激しく変化する時代にあって、伝統を継承する、しかも「能楽」の如く厳として「型」を継承するには、想像を超える難しさと創造性が伴うのではと感じています。

上記のような問題意識を抱えています。14代の思いとお考えを少しでもお伺いできれば、何よりも嬉しく存じます。

どうかよろしくお願い申し上げます。

2010年2月13日

1.3 有田・伊万里見学調査のお礼文（面談・協力していただいた方々へ）

さる3月3-4日の有田・伊万里調査では、いろいろとご配慮いただき有難うございました。おかげさまで、楽しく意義深い見学調査を楽しむことができました。

直前の3月2日に、食中りでお腹を壊すというハプニングに見舞われました。果たして調査ができるかと心配していましたが、百武様はじめ皆様の元気あふれるパワーをいただき、乗り

切ることができました。感謝にたえません。

添付の資料は、この2日間(3-4日)に見学・面談していただいた方々の一覧で、いただいた資料も付けています。ご多用の中、丁寧に対応していただき、心からお礼申し上げます。

佐賀県陶磁器工業協同組合の歩みは、共販・集金システムにみるようにユニークなもので産地振興にも大きな役割を果たしてきたようですが、需要の減少や輸入増加など需給環境が激変し、直販やインターネット販売なども広がるなか、新たな対応に迫られています。それに向けて努力されているご様子も、うかがうことができました。

柿右衛門をはじめ3右衛門への面談が適ったことは、大変有難いことでした。それぞれが独自の考え方ややり方でもって、伝統を継承しつつ現代さらに未来にいかにか生きるかを追究されているご様子を直接伺うことができました。14代柿右衛門様から伝わってくる、深い伝統と様式を担う責務の重大性と、その中で培われた深い哲学性。伝統との格闘の中で培われた、今右衛門・前田様の凛としたお姿と息遣い。窯として生きる、もう少し自由な生活提案の創作領域に軸足を置かれる源右衛門窯の館林様。それぞれ三者三様の歩み方を比較する機会を得ることができました。また柿右衛門窯では、相談役の酒井田正宏様に窯場や作業場など敷地内の見学をさせていただき、ご丁寧な説明に耳を傾けつつ歴史的な時空間を味わうことができました。

畑萬陶苑は、経営の維持・発展と伊万里の再生には、創造しか未来に道なしと徹しておられます。畑石様のバイタリティあふれる創造性と魅力的な語りに、引きこまれてしまいました。マルチファンクションランプや下から入れるペットの骨壺、陶板弁当、磁器風鈴、磁器製ビールグラス、そして伊万里再生に向けた壮大

な思いやプランなどなど。

柿右衛門と畑萬陶苑。この両者は、対照的な歩みのように見えますが、伝統の継承・発展という深部ではむしろ極めて近いのではないかと感じています。

まちづくりと産業観光では、筒井様および西山様、尾崎様から、実に興味深いお話を拝聴することができました。筒井様の音楽性および国際性、そして行政・地域・業界への経験知の深さを感じ、それを観光情報センターの新生に傾注されているご様子が印象に残っています。

西山様の創意的かつガッツあふれる行動力とボランティア精神には、頭が下がります。美しい着物姿は伝統の街並みに映えていました。尾崎様の歴史的な含蓄のある語りも魅力的でした。このような女性パワーが、有田のまちづくりに大きなインパクトをもたらすのではと感じています。

3月4日9時にお伺いした伊万里歴史民俗資料館は、10時からの開館で責任者も来られていませんでしたが、入らせていただき資料もいくつかいただきました。また、佐賀県立九州陶磁文化館では学芸員の家田様から、丁寧な説明をいただきました。伊万里・有田の焼き物の歴史をより広い視点から学ぶことができ、感謝申し上げます。

以上、限られた時間の中、盛り沢山の見学調査を行うことができました。面談していただいた方々、および斡旋していただきました百武様に、心からお礼申し上げます。

今年度中には、できるだけ早い機会に何らかの形でまとめたたく考えています。その際には、電話や電子メールなどで伺いますので、その節はご教示を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

皆様のご健勝、ご活躍を心からお祈り申し上げます。

げます。

2010年3月8日

伊万里市歴史民俗資料館 2010年3月4日(木)

『平成7年度企画展図録 伊万里の陶器商人』

伊万里市歴史民俗資料館, 1996年(購入)

『平成8年度企画展図録 伊万里の陶器商人』

伊万里市歴史民俗資料館, 1996年(購入)

「伊万里市歴史民俗資料館だより」第15-20号, 伊万里市歴史民俗資料館, 2004-9年

第1回市民文化フォーラム『博物館美術館を
考える—文化を生かした街づくりへの創造—』
講演録, 伊万里市教育委員会, 2006年

第2回市民文化フォーラム『博物館・美術館
をまちづくりに生かす—博物館・美術館と観
光—』講演録, 伊万里市教育委員会, 2006年(購
入)

パンフレット「伊万里市歴史民俗資料館」

伊万里市教育委員会『古唐津 陶片の美』

2008年

佐賀県立九州陶磁文化館(学芸課主幹 家田
淳一) 2010年3月4日(木)

パンフレット「佐賀県立九州陶磁文化館」

九州陶磁文化館監修『古伊万里への道』九州
陶磁文化館開館20周年記念・日蘭交流400周
年記念, 2000年(購入)

資料3 その他参考資料

坂井 隆『「伊万里」からアジアが見える—
海の陶磁器と日本—』講談社, 1998年

下平尾 勲『現代伝統産業の研究—最近の
有田焼の経済構造分析—』新評論, 1978年

14代酒井田柿右衛門『余白の美 酒井田柿
右衛門』集英社新書, 2004年

永竹 威『日本の陶器1 伊万里』保育社,
1973年

日本経済新聞, 2009年9月12日付。

保母武彦「特集 FUTURA シンポジウムに

資料2 入手資料一覧

佐賀県陶磁器工業協同組合 2010年3月3日
(水)

『佐賀県陶磁器工業協同組合50周年記念誌』

佐賀県陶磁器工業協同組合, 1999年

岩尾磁器工業株式会社『IWAO』

パンフレット「有田雛のやきものまつり」有

田雛のやきものまつり実行委員会

今泉今右衛門 2010年3月3日(水)

『色鍋島と今右衛門』今右衛門窯元

源右衛門窯 2010年3月3日(水)

『源右衛門窯』源右衛門窯

「源右衛門窯 窯歴」源右衛門窯

“伝統的工芸品の経営とマーケティング”プ
ロジェクト推進部会「企業イメージの構築とブ
ランド形成—源右衛門“古伊万里の心”—」『明
治大学博物館研究報告書15』2010年

有田観光情報センター

筒井孝司「有田観光情報センターの概要」

有田観光情報センター『有田観光ガイドマッ
プ 有田スタイル』

有田町づくり女性懇話会

西山美穂子「有田町づくり女性懇話会活動紹
介」2010.1

「陶芸の歴史に思いはせ 歩いて楽しいやき
ものの町」日本経済新聞2009.9.12

南畑萬陶苑 2010年3月3日(水)

「ぶらりいまりめぐり」

「伊万里 秘境の里・大川内村 みて歩き」

「伊万里のまち探検まっふ」

「伊万里市 陶器商家資料館」

「観光ツアーマップ 伊万里の魅力発見」伊
万里市観光ボランティアガイドの会

おけるコメント」『九州国際大学経営経済論集』
第16巻第12号，2010年1月。

三杉隆敏『マイセンへの道』東京書籍出版社，
1992年

瑞浪市「職員人材育成基本方針」岐阜県瑞浪
市。

K. マルクス『資本論』第1巻。

『広辞苑（第6版）』岩波書店。

「有田焼」(<http://ja.wikipedia.org/wiki/>)

「色鍋島 今右衛門」(<http://www.imaemon.co.jp/>)

「源右衛門窯—工房に息づく古伊万里の心」

(<http://www.gen-emon.co.jp/about/history.html>)

「特集：伊万里・有田焼」(<http://www.koug-ei.or.jp/crafts/0422/special>)

「アインシュタインの眼—陶器の炎—」(NHK
テレビBSハイビジョン，2010年1月24日放映)

「百年インタビュー 陶芸家 第14代酒井
田柿右衛門」(NHK テレビBSハイビジョン，
2010年5月20日放映)

「あさいち—有田特集—」(NHK テレビ，
2010年12月16日放映)